

しづおかげんはままつし
静岡県浜松市

たか つか い せき
高 塚 遺 跡



第1図 高塚遺跡周辺遺跡分布図

2008

(財)浜松市文化振興財団

例　言

1. 本書は、浜松市南区高塚町における高塚駅周辺地区整備事業に係り、静岡県浜松市南区高塚町931-1で実施した高塚遺跡の範囲確認調査報告書である。
2. 調査期間　現地発掘調査 2008年9月 1日～9月12日
整理・報告作業 2008年9月12日～12月22日
3. 調査対象面積 3,000 m²
4. 調査面積 332 m²
5. 調査体制　調査委託者 浜松市 浜松市長 鈴木康友（主管 区画整理課）
調査受託者 財団法人浜松市文化振興財団（理事長 庄田 武）
調査指導機関 浜松市教育委員会
(生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行)
調査担当者 川江秀孝・仲川美津保(生涯学習課文化財担当)
調査補助員 熊谷洋子(生涯学習課文化財担当)
6. 原稿は、川江秀孝が執筆した。
7. 調査に係る費用は、全額委託者が負担した。
8. 本書に係る諸記録は、浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。



第2図 調査区周辺地形図

範囲確認調査の経過

- 8月 28 日(木) 晴 コンテナハウスとトレンチの設置位置と基本杭の打設位置を決めるため、現地で略測量を行う。
トレンチ(試掘溝)を仮設定して、東から1トレンチ～3トレンチとした。
※後に、1トレンチを3トレンチに、3トレンチを1トレンチに名称を変更した。
- 神原町埋蔵文化財調査事務所で現地に搬入する発掘器材を準備した。
- コンテナハウスとトレンチを設置する。
- 8月 29 日(金) 雨 発掘資材を現地に搬入する。基準点測量を行い、T.1～T.6(第3図)を設置する。
- 9月 1 日(月) 晴 水準測量を行い、各基準点(杭上)に仮水準点を置く。
- 3トレンチ(旧1トレンチ)から重機による盛土(造成土)の除去を開始する。午後から2トレンチを掘削する。3トレンチの南半部で、基盤の黄褐色砂層を掘り込んだ溝と小穴(ピット)が出来る。両トレンチの中央部から北寄りにかけて、地盤が谷状に窪み、低湿地特有の黒色粘土層が充满していた。窪みの底には東西方向に走る溝が認められた。
- 現地作業を中止する。前日に作成した図面を整理する。
- 3トレンチを精査して、基盤を掘り込んだ遺構の検出を試みる。トレンチの西壁面で土層の堆積状況を観察する。遺構の平面図を作成する。谷状窪地が水没したため前日に見えた溝が確認できなくなった。3トレンチの発掘完了写真を撮影する。
- 9月 4 日(木) 曇 2トレンチを精査する。南半部で土坑と溝を検出する。遺構の一部を掘削して土層の堆積状況を観察したが、遺構などが刻まれた兆候は認められなかった。また、遺物の包含も確認できない。遺構の全掘は避け、平面形の計測と写真撮影するに止めた。
- 2トレンチの西壁面で上層の堆積状況を観察する。
- 3トレンチから埋戻しを開始する。2トレンチを精査して遺構の検出を試みたが、新たな遺構は認められなかった。午後、2トレンチを埋戻す。1トレンチの掘削準備として、除草と駐車場区画用トラロープの撤去などを行う。
- 9月 5 日(金) 晴 1トレンチで重機掘削を開始する。搅乱が著しく、これと言った遺構は認められない。
- 9月 8 日(月) 晴 1トレンチを精査する。近現代の水田、コンクリート製井戸枠などが表れる。土層断面の観察と計測を行い、発掘完了写真撮影する。午後から埋戻す。発掘器材を神原町へ撤収する。
- 9月 10 日(水) 晴 出土品を洗浄する。遺構と土層観察データを整理する。
- 9月 11 日(木) 晴 出土品を写真撮影する。調査完了届けを作成する。
- 9月 12 日(金) 晴 調査結果概要を作成する。
- 9月 16 日(火) 晴 出土品の実測と証書など調査報告書を刊行するための準備を始める。
- 9月 25 日(木) 晴 コンテナハウスとトレンチを撤収する。

高塚遺跡の位置と環境

旧浜松市域の地形は、北部の山間地、天竜川右岸の沖積平野、三方原台地、そして台地と現海岸線までの間に広がる沿岸低地帯に大別される。この沿岸低地には6～8列の砂丘が形成されている。台地の南縁は比高差20～25mの海蝕崖で、崖下の第1砂堤列に県道童神寺線踏線が走っている。第2砂堤列は西郵便局付近まで確認できるが入野町までは及んでいない。第3砂堤列には旧国道一号線とJR東海道本線が走っている。高塚遺跡は第3砂堤列のほぼ中央部に位置し、JR高塚駅の周辺で古代～中世の遺物が広範囲から採集されて知られるようになった(第1図)。しかし、遺跡の性格や規模など詳細は分かっていない。

台地上には古墳前期の大集落である坊ヶ崎遺跡と中平遺跡があり、入野町の大平遺跡では豪族居館跡が検出されている。砂堤列上でも幾つか遺跡を見ることができる。第1砂堤の志都呂町東前遺跡(縄文前期～弥生・古墳中後期、奈良平安～中世)では弥生後期の組帶文土器、銅塊入り壺、古墳中期の土製と石製の祭祀遺物、奈良時代の木簡などが出土して注目される。志都呂町角江遺跡(縄文後期～弥生・奈良平安時代)では弥生中期の人面付壺、銅鐸形土製品、木製農具類が出土した。その他、入野町八反田遺跡(奈良時代)、入野町村西遺跡(鎌倉時代)が知られる。舞阪町付近で砂堤列は收敛して、第3砂堤列の西端が分からなくなっている。弁天島と舞阪町及び篠原町中田尻遺跡は弥生中期の遺跡である。高塚式古墳の分布は希薄である。舞阪町天白遺跡、若林町東野宮遺跡、若林町村西遺跡、東若林遺跡では7～8世紀の住居跡を検出された。特に若林遺跡の和銅懐孕が注目される。第3砂堤列では、7世紀後半代になつて急速に開発が進んだことが知られる。

範囲確認調査の概要

調査の方法

1757年の都市計画図(第2図)を見ると、調査対象地は、JR高塚駅方面から続く微高地(砂丘)の西端で、周辺には水田が広がっているのが分かる。1970年代にはプロパンガスの貯蔵施設が建設されている。1990年代に更地となって以降、駐車場として再整備され、敷地の全面に碎石が敷均された。このことから、碎石などの造成土を除去するため重機を用いたことにした。

調査開始前に測量業者に委託して基本杭を6本(T.1～T.6)打設して、これに水準点を置いた。次に、T.1とT.2の間を1レンチ、T.3とT.4の間を2レンチ、T.5とT.6の間を3レンチとした(第3図)。それぞれの基本杭を結んだ線を中心にして、東と西に各1mづつ取って幅2mのレンチ(試掘溝)とした。1レンチでは駐車場との兼ね合いから、西側へ0.5m、東側へ1.5m取った。

座標一覧表

各基準点間の距離	
T.1-T.2	59.000m
T.3-T.4	56.000m
T.5-T.6	54.000m
T.1-T.3	29.000m
T.3-T.5	20.000m
└T.3, T.1, T.2=90°	
└T.5, T.3, T.4=90°	

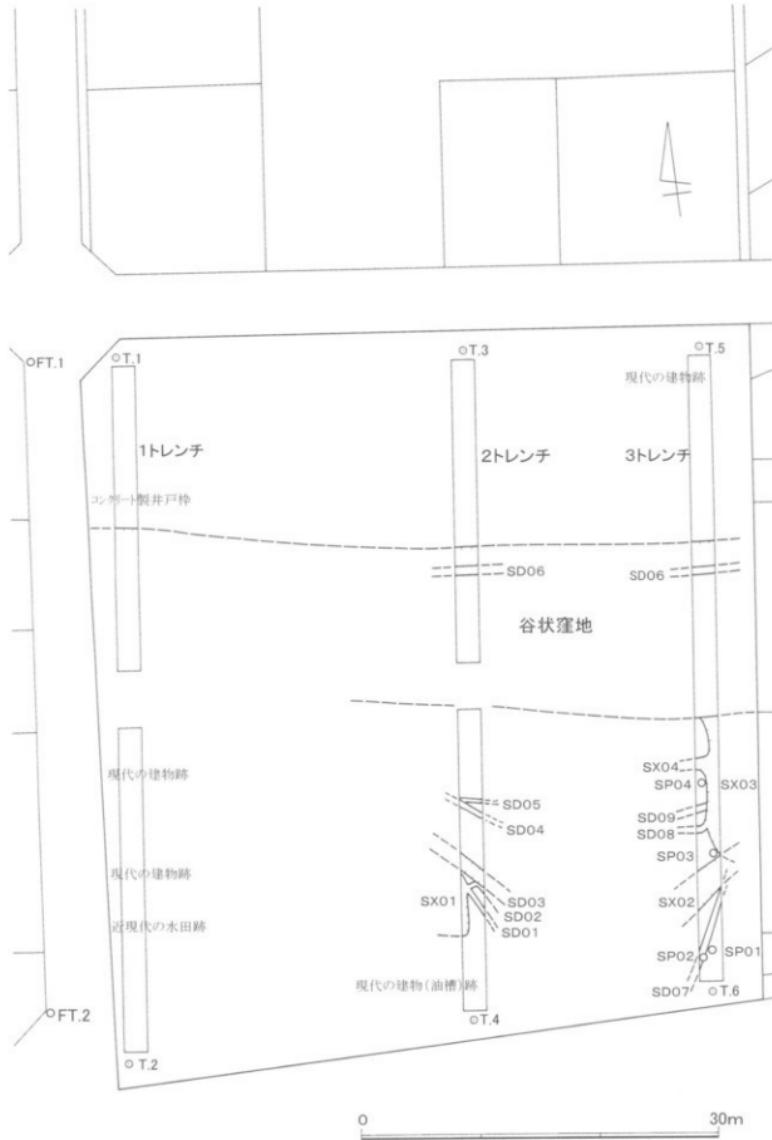
点名	X座標	Y座標	標高
FT. 1	-144872.020	-75063.761	2.132
FT. 2	-144930.942	-75070.848	2.267
T. 1	-144875.143	-75055.921	2.142
T. 2	-144933.709	-75063.065	2.273
T. 3	-144878.655	-75027.134	2.146
T. 4	-144934.243	-75033.916	2.134
T. 5	-144881.077	-75007.281	2.233
T. 6	-144934.680	-75013.820	2.110

南北方向に設定した3本のトレチで、まず、バックホーを用いて造成土および旧表土(耕作土)を除去した。掘削開始直後から表面が磨耗した土器の細片が出始めた。旧表土層と基盤との間が遺物包含層になっていると想定されたが、遺構の有無を確認することに主眼を置いたため、分層発掘は行わず、各層で遺物の包含状況を確認しながら基盤砂層の直上まで掘り下げた。当該地では現在も駐車場として利用されている関係で、1・2トレチでは通路を確保した。このことから一部に未発掘部分が生じた。結果として、第3図に示すとおり、各トレチの幅は平均2.1mで、総延長158mを掘削し調査した。

重機掘削終了後、人力で発掘面を平滑にして遺構の検出に努め、溝(SD)と土坑(SX)、小穴(SP)を検出した。検出した遺構は、時期や性格を求めるのに必要な範囲は底まで掘削してみたが、原則として全掘しないで平面形を観察するに止めた。検出した遺構と土層堆積状況の計測は、各トレチの南端に設置した基準点T.1、T.4、T.6を測量の基点0として行った。

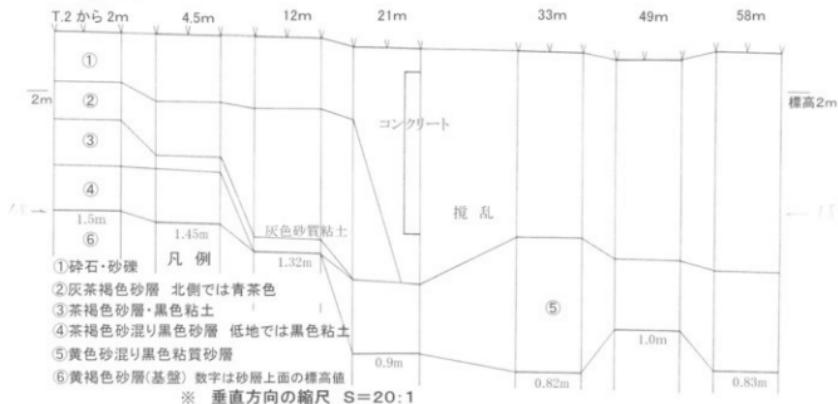
土層の堆積状況

各トレチの西壁面で土層の堆積状況を観察し、作成した図面を柱状図にして第4図に示した。堆積する土層は概ね①～⑥に区分される。①は造成用に三方原台地から搬入された黄色粘土混じりの砂礫と、駐車場整備用の青灰色の碎石である。ガス貯蔵関連施設が建築されていた関係で、1トレチでは21m地点付近を中心広範囲に渡って搅乱されていた。搅乱孔には産廃混じりの砂礫が厚く堆積していて、その上を碎石で覆われていた。また、北半部は現代の水田を砂礫で埋め立てて宅地化されており、その一角、50m地点付近にコンクリート製の井戸枠が設置されていた。②は、やや灰色の粘土が混じる灰茶褐色砂層で、用地造成前は畑地の耕作土であったと思われる。この土層は調査区のほぼ全域で認められ、土器の細片を含んでいた。1トレチでは4.6m地点から北が現代の水田で、②相当層は灰色砂質粘土層であった。3トレチでは3.2m地点付近まで②が基盤砂層の上面を覆っていた。調査対象地の北側が低地(現水田)に接する関係か、北半部で②層は若干グライ化して青茶色を呈していた。③は茶褐色砂層であり、遺物を少量含んでいる。元来、②と③は同一の地層で、耕作が及んだ範囲が②と思われる。2トレチでは、8.5m地点付近から南側の基盤が大きく産み、③が深くまで堆積していた。④が堆積する以前の遺構の可能性も考えられたが、土層断面でも平面観察でも遺構とする根拠を見出せなかつた。④は茶褐色の砂が混じる有機質分の強い黒色砂層である。溝(SD07とSD08)及び谷状窪地の上半を覆う黒色粘土層に繋がっている。1トレチの南半部では基盤の上にそれが直接乗る。一見すると泥炭層と見紛う土壤であり、水成堆積と思われる。2トレチの④と1トレチの⑤上半部は同水準なので、水成堆積ならば、1トレチにも④が及んでいると考えられる。しかし、1トレチでは湧水で詳細に観察しなかつたためか④を確認することはできなかつた。⑤は基盤の黄褐色砂を斑文状に含んだ有機質分の多い黒色粘質砂層である。⑤の平面的な広がりと最深部の標高は(第4図の数値)、1トレチでは12m地点から45m地点の範囲で、最深部の標高0.82m。2トレチでは20m地点から40m地点の範囲で、最深部の標高1.35m。3トレチでは23m地点から38m地点までの範囲で、最深部の標高1.22mである。このことから、⑤が東から西に向かって大きく扇形に広がっているのが分かる。この凸レンズ状に産んだ範囲を谷状窪地と仮称した。2トレチでは谷状窪地の最深部に溝 SD06があり、溝内の標高1.4m付近で奈良時代の須恵器(第7図16)が出土した。また、3トレチ28m地点付近の谷の駆け上がり部で、13世紀の山茶碗と中世土師器(第7図8・10)が出土した。このことから⑤は8世紀以降の水位上昇により13世紀ころに堆積した土層と推察される。なお、⑤は伊場大溝が埋没して最後に堆積した土層(伊場Ⅲ層)と質色共に近似し、包含する遺物の年代も一致している。⑥は黄褐色砂層で遺跡の基盤である。第2図によると、東西方向に伸びる第3砂堤列(旧東海道が乗る)の支丘が、JR高塚駅の中央部を通って当該調査区の東側を掠めて北に伸びている。このことから当該地は第3砂堤列の一角で、⑥は砂丘砂と理解される。また、砂丘周縁部の水田は堤列間低地と見て取れる。谷状窪地は、砂丘の縁辺部に形成された一種の侵食谷のように見える。

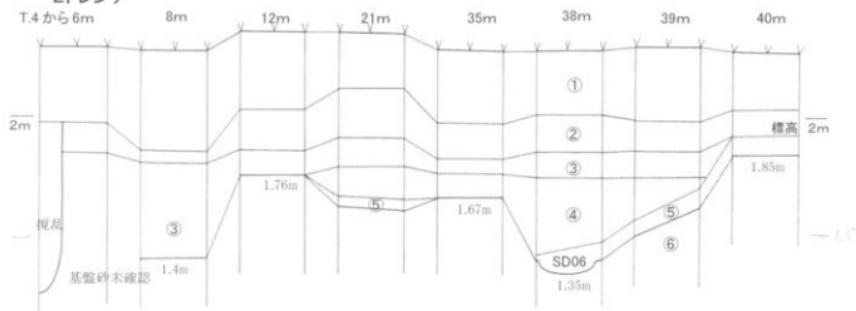


第3図 発掘区全体図・遺構配置図

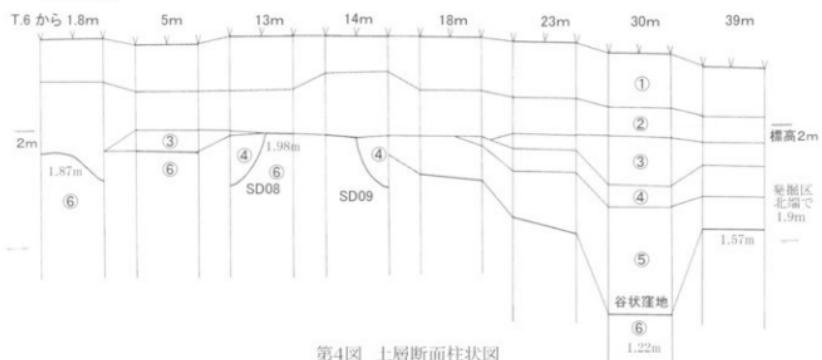
1トレンチ



2トレンチ



3トレンチ



第4図 土層断面柱状図

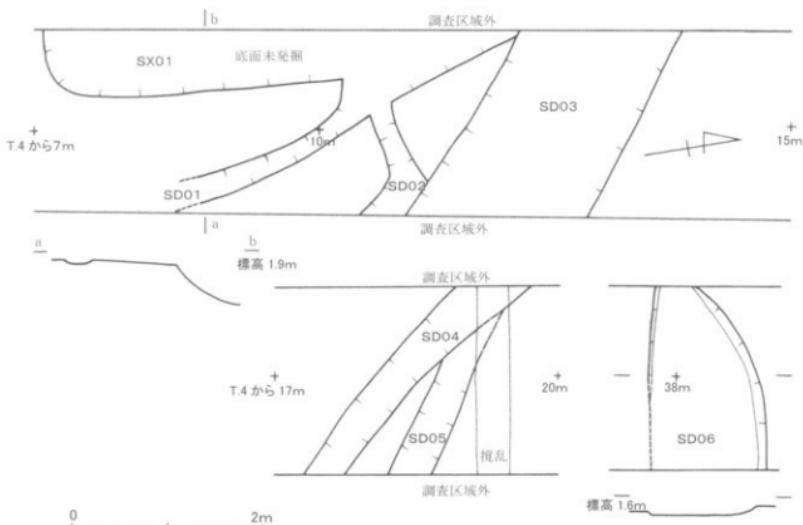
検出した遺構

第2・3トレチで溝(SD)、土抗(SX)、小穴(SP)を検出した(第3図)。幅2mの範囲内に限定した調査なので、各遺構の全貌は確認していない。確認した範囲内での詳細を第5図と第6図に示した。通常、土壙を(SE)、不明遺構を(SX)と表記しているが、今回、性格が判然としなかった遺構は土抗をSXと表記した。

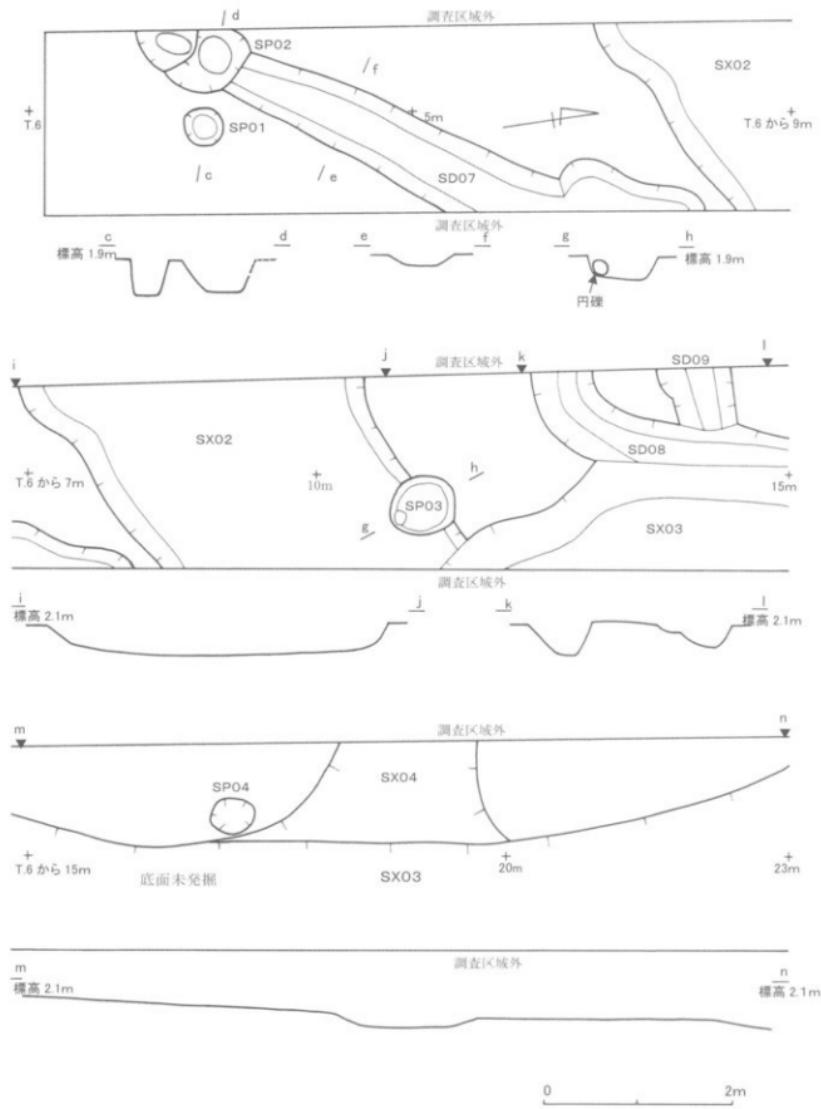
2トレチ7m地点から15m地点の間でSD01～SD03とSX01が重なって検出された。遺構の切り合い関係は判然としない。SD03が他を切っていると見えた。SD01の幅0.55m、深さ0.03m。SX01は深さ0.35mまで確認した。SD02の幅0.25m。SD03の幅1.55m。17m地点から20m地点の間にSD05を切るSD04がある。いずれも③の茶褐色砂が充填している。各遺構の表面を削った限りでは、遺物を検出していない。38m地点の谷状崖地最深部で、谷の向きに平行して東西方向に走るSD06が検出された。検出直後には幅0.5mの一直線の溝に見えたが、降雨で水没した後の精査では不整形に仕上がった。3トレチでは南半部に遺構が密集していた。SD07は幅0.7m、深さ0.3mで③を覆土している。SX02は幅2.8m、深さ0.25mで④を覆土としている。SD08は幅0.65m、深さ0.35mで④を覆土としている。SD09は幅0.65m、深さ0.3mで①を覆土としている。SP01は直径0.35m、深さ0.4m。SP03は直径0.65m、深さ0.26mで拳大の円礫が認められた。

遺構の年代観を示す遺物は、SD05の奈良時代須恵器以外ではなく、各遺構の年代を俄かに決めがたい。包含層から7～8世紀、12～13世紀、16世紀頃の遺物が検出されたことから、概ね、この期間内に収まると思われる。検出した層位と覆土からSD06は8世紀後半。SD08、SD09とSX02は12～13世紀頃。その他は16世紀頃と思われる。調査対象地の南東部に遺構が集中している。

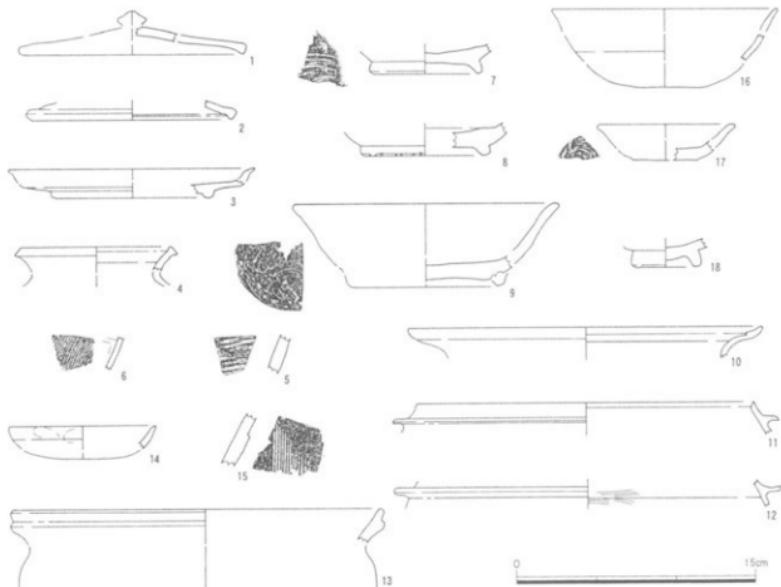
第2図によれば、当該地の東側と南側に砂丘が広がっている。このことから、当該地は遺跡の末端部に近く、中心部は南東付近と判断される。



第5図 2トレチ内の遺構



第6図 3レンチ内の遺構



第7図 出土遺物実測図

出土遺物

採集した遺物は、いずれも細片であり原形に復しがたいが、特徴的なものを図示した。1は須恵器摘蓋である。摘みを欠くが、摘みの欠落痕の径が小さいことから8世紀後半代である。2は須恵器摘蓋の口縁折り返し部である。折り返しは小さく、端部を肥厚させて折り返し様に仕上げている。8世紀後半代である。3は須恵器盤の底部である。断面方形の高台が、盤部の屈曲箇所から離れて底部の中心部近くに付けられている。8世紀後半代である。4は須恵器壺の口縁部である。と思われる。5と6は須恵器甕の胴部で、7世紀代と思われる。7は12世紀後半代の山茶碗である。8と9は13世紀の山茶碗である。8の高台に初痕が残る。10は13世紀の伊勢形鍋である。8と10は3レンチ谷状窪地の駆け上がり部で③肩から検出した。11～14は中世士師器の羽釜・内耳鉢・カワラケである。16世紀頃と思われる。15は瀬戸播鉢である。16はSD05の底から検出した8世紀後半ないしは9世紀初頭頃の須恵器無高台碗である。17は2レンチ③肩から検出した16世紀頃の山皿である。18は1レンチで灰色砂質粘土層から検出した瀬戸碗である。

おわりに

JR 高塚駅周辺は古代東海道の要衝でもあることから、大規模な遺跡の存在が予想されている。しかし、本格的な発掘調査を経ておらず、実態は未解明のままである。今回の調査で7～8世紀と12～13世紀、16世紀頃の集落遺跡と確認できた。同じく第3砂堤列に乗り、和銅開珎や緑釉陶器を出土させた若林遺跡と同じ時期に営まれた遺跡と判明したのは意義ある成果であろう。今後、高塚駅周辺の開発が進むことを予想されるので、万全を期して発掘調査を行い、より一層、高塚町内の遺跡が解明されることを期待したい。

写真図版 1



発掘前全景(南西から)



重機掘削風景



精査・実測風景

写真図版 2



1 トレンチ全景(南から)



2 トレンチ全景(南から)



3 トレンチ全景(南から)

写真図版 3



2トレンチ 土坑・溝

SX01 SD01 SD02 SD03



2トレンチ 溝

SD04 SD05



2トレンチ谷状窪地・溝

SD06

写真図版 4



3トレンチ 溝・小穴
SD07 SP01 SP02

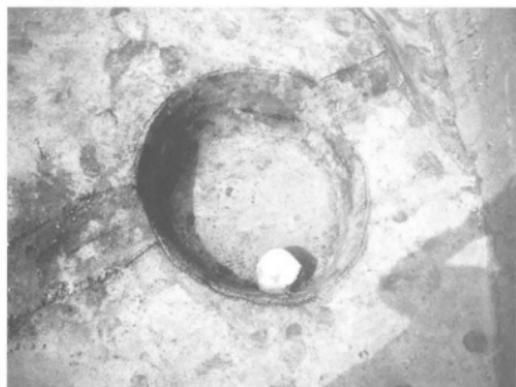


3トレンチ 溝
SD08



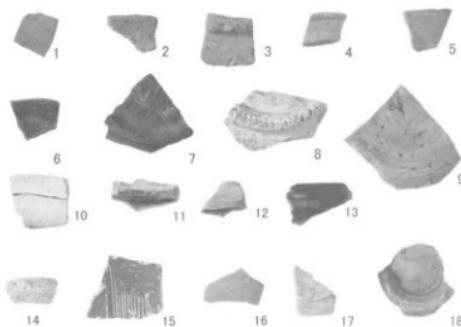
3トレンチ 溝
SD09

写真図版 5



3トレンチ 小穴

SP03



出土遺物



発掘後全景

(碎石敷均し状況 北西から)

報告書抄録

書名	高塚遺跡(たかつかいせき)				
副書名					
卷次					
シリーズ名・番号					
編著者名	川江秀孝				
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1 オーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当 (浜松市教育委員会の補助執行) 〒430-0946 浜松市中区元城町103-2 053(457)2466				
	財團法人 浜松市文化振興財團 〒430-7790 浜松市中区板屋町111-1 053(451)1151				
発行年月日	2008年12月20日			調査面積	332 m ²
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 ○.°'."'	東経 ○.°'."'	調査期間
たかつかいせき 高塚遺跡	しづおかけんはまつる 静岡県浜松市 みなみひがしのまちのまち 南区高塚町 931-1	22202	34° 41' 27"	137° 40' 52"	2008年 9月1日～ 9月12日
調査原因	高塚駅周辺地区整備事業				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
高塚遺跡	集落	古墳 奈良・平安 中近世	溝・土坑・小穴	須恵器・山茶碗 内耳鍋・羽釜・カワラケ	

たかつかいせき 高塚遺跡 2008年12月22日 発行 財團法人 浜松市文化振興財團 編集 浜松市教育委員会 (浜松市生涯学習課文化財担当) 〒430-0946 静岡県浜松市中区元城町103-2

生活文化部生涯学習課(文化財担当)

TEL053-457-2466 FAX053-457-2563